

在京雫石町友会 会員 **川口 清さん**



国立と母なる里をつなぐ秘話

私の職場・鉄道総研には故郷の後藤新平の像がある。そして、岩手山の麓には鉄道の父・井上勝らが開拓した英国式大農場がある。もしも井上や後藤ら鉄道先人の留学と挑戦が無かったなら、故郷の畜産・文学・観光までもが衰退していただろう。そこで、先人達の秘話と望郷の念を一言伝えたい。

後藤は復興長官や東京市長として有名だが、苦難の新幹線構想の生みの親でもある。欧米並みの高速大幹線の都市間整備を唱える後藤は、地方軽便鉄道網推進の原敬らとの政争に敗れ、技師らと共に満鉄等に去る。以後、私鉄軽便鉄道が国費支援の下で各地に整備されるが、多くが赤字線で消滅。残りも新生国鉄に集約された。今で言う軽便鉄道バブルである。雫石でも盛岡間は残ったが、生家裏の森林軌道・鶯宿線（転用未完の川尻線：敷設法）が私の通園直前に消滅した。

話は戦後復興に移る。農業小国化の占領軍分断（シャグノン更迭）の後、後藤の構想を具現化したのが新総裁の十河信二である。十河は、近代工業国再興のため、先ず、国立・国分寺間に鉄道の大学や研究所から成る鉄道

学研都市を整備した。次に、政治介入を避けるため、世界銀行から巨費を借入れて新幹線を竣工させた。これが焦土からの“奇跡の復興と産業創出秘話”の序章となる。あれから半世紀、交通の発達は商圈と産業盛衰を今や国外まで及ぼしている。新幹線駅は故郷にもできたが、一方で“商圈内の相対的競争力向上や文化の発信”にどう活かすのか、顧客路線の戦略と住民の選択が気になりである。

最後に自身の話を少々。恩師・恩人の支援や新幹線の夢を背に、貧しき十五の私は岩手を離れ、鉄道大へ進学した。卒業後はリニアや新幹線、在来線の研究に奉職。欧米各地の交通文化や産業を見聞し、明治の殖産・関東大震災・戦後復興の局面での井上・後藤・十河らの技にも触れた。この間、故郷では安庭の駄菓子屋や魚屋、鍛冶屋、豆腐屋等の商店街が湖に消え、親や恩人達が旅立った。初老を迎えて顧みれば、恩師らの映画“大いなる旅路(1960)”が人生の原点であり、父なる山々の変わらぬ原風景に、母なる里への思いが募るばかりである。



リニア車両実験の頃
(宮崎日向, 1983)



妻への旅案内の頃
(西独Bingen, 1985)



国際会議授賞式
(Montreal, 2006)



鉄道総研の後藤新平像
(東京国立, 2014)

川口 清さんプロフィール

1955年生まれ。御所・安庭出身（安庭小一御所中）。東京都立川市在住（5人家族）。国鉄中央鉄道学園大学課程卒
受賞歴：優秀論文賞（WCRR2006：世界鉄道研究会議/カナダ）、井深特別賞（元 SONY 会長基金）、有隣会長賞（卒論）等。（公財）鉄道総研に永年奉職/主任研究員：車両や公共交通機関論を研究（譲渡特許約 30 件）。現在は同グループ(株)テス/営業部長：関係省協会や各研究所の専門家活動・内外コンサルに従事。
資格：技術士（機械/鉄道）P.E.Mech 等